

出会い (18)

宇宙の子守歌

奥村 一郎



1. 幸い

ちょっとした思いがけないことは、誰でも、どこでもあるものだが、ふとうれしくなって考えをめぐらすようなことがある。おやつ茶菓子ぐらいのものかもしれないが、小さいマッチの頭の火から大きな炎になることもある。

少し前のことだが、東北の盛岡にしばらく滞在していた時のこと。NHKテレビの日曜番組「のど自慢」の時間で、ちょうど終わりの場面になるところ、演歌のタレント、小林幸子さんが、美しい衣装にきれいな声で歌い始めていた。美声とともに流れでるその時の歌詞に思わず耳を引かれた。あわてて、小さい紙切れにメモをしたので、少し間違っているかもしれないが、あとでも誰か教えてくだされば幸い。曲もついでに。

さいわいには ふたつの かたちがある
ねがいごとが かなえられたとき
それが ひとつのさいわいのかたち
そのつぎは ねがいごとなんか みんな すてっちまえ
それが ふたつめの さいわいのかたち

その時、ふと心に浮かんできたのが中世スペインの偉大な神秘家、十字架の聖ヨハネの言葉：「Nada(無)と Todo(全)」。『みんなすてっちまえ』の「無(Nada)」においてのみ、「全(Todo)」となる神に出会う幸いがあると聖者はいう。禅語の「無一物中無尽蔵」もそれにピッタリ。

にしても、偉大な聖者の教えと現代日本の演歌とは、宗教も文化も全く違う、あまりに縁遠い二人の世界。だが、人の心の奥底にある真理はひとつ。その真理のなかで二つの想いが結ばれても不思議ではない。七夕の美しい夜空に天の川を挟んで、牽牛織女が愛の契りを交わす場面を思い起こす。人間の真の幸福は、誰にとっても同じ、という素晴らしい現実をそこにも見るかのようであった。まさに、宇宙の子守歌を聞くかのような。

2. お洗濯

いつかのカトリック新聞に出ていた小話。

「すこしばかりの晴れ間を見て、急いで洗濯物を干しに出た。3歳の娘もあとからついてきた。『マリちゃん、お洗濯物が乾くまで

奥村 一郎 / おくむら いちろう

1923年岐阜県生まれ。48年東京大学法学部政治学科卒業、東京大学文学部宗教学科に再入学。51年卒業と同時に、カトリック修道会、カルメル会入会のため渡仏。57年、ローマのカルメル会国際神学院で司祭叙階。59年帰国後、仏教とキリスト教の交流分野で活動。79年よりバチカン諸宗教対話評議会顧問神学者。

著書は、『断想』『主とともに』『祈り』(女子パウロ会)、『わたしの心よ、どこに』(サンパウロ)、『聖書深読法の生いたち』(オリエンズ宗教研究所)など多数。

雨が降りませんように、いっしょにマリアさまにお祈りしましょうネ。きっと、聞き入れてくださるわ』といって、二人で手を合わせ『めでたし、せいちょう みちみてるマリア……』と一息懸命祈り始めた。すると、途端にポツリポツリと雨つゆが落ちて来た。一瞬、『ああ、どうしよう！……小さい娘に嘘をついてしまっ！』と、マリちゃんの方を見ると、『アッ！ お百姓さんが先に雨をお願いしちゃったのネ』と嬉しそうにいう。思わぬ答えにホッとして胸をなでおろした。見事なチビッコ神学者。動脈硬化になりやすい大人の頭に対し、柔軟な幼児思考の巧みな宙返りで自他ともに救われる見事さ。難しい大人の言葉でいうと、前者は実体神学、後者は関係神学。まさに、3歳のマリちゃんは、柔軟な「関係神学」を地でいった。ママさんは、自分のことだけしか考えない。マリちゃんの開いた心と頭は他人の必要に気付く広さがある。野球でいえば、ママはバットだけ握りしめて哀れな空振り。マリちゃんはタイムリーヒット。会ったこともないマリちゃんだが、あわれな大人の私の目を開いてくれたひと時。「親を育てる子供」という面白い題の本が出てきているが、こんな話がいくつももあるかもしれない。

3. 神様

やはり、また、新聞のなかの小話で、「神様」と題する面白い記事が目についた。

「5歳の息子が、バスケットボールで『NBAの神様』と言われたマイケル・ジョーダンの引退会見をテレビで見ていた。『見て見て、神様やって。へえー、神様って見えるんや。人間みたいやなあ。でも何言ってるかわからへんから、やっぱり神様や！』と感心していた」
 (「いわせてもらお」欄。朝日新聞、大阪版、1999年9月12日、日曜日 兵庫県加古川市、もちろん英語で会見していました。30歳)

前記の「お洗濯」の話にも似て、幼な子の思考にみる見事なまで



の弾力性に驚く。張り切れるボールのように、自由に思いが飛び跳ねる。寄稿されたお母さんは、どのように受け取られていたのかは正確に分からないとしても、この短い記事には、バスケットボール選手の手から手に飛び回るボールのように、「神」という言葉が目まぐるしく飛び交うのを見る。チビッコ神学の可愛い兆しかも。ドンと飛躍して、大人用の神学にきりかえれば、「見えない神が見える神になって」ビックリした坊やの言葉そのものが、「神人キリスト」という途方もなく難しい神学の扉をなんの苦もなく開いてくれる。また、それに、「何言っているかわからへんから、やっぱり神様や」という。これも理屈っぽい大人の神学者など足元にも及ばないのでは…。

4. 宇宙の子守歌

チビッコ哲学者(1)

決まっていなければならない

四年 岩月 美弥子

2+3=5 5+4=9

決まっていなければならない

決まっていけない世界！

空は、千色の色がまざっていて、

土は、九千色の色がまざっていて、

女の子は、おとなしく、しとやかに

なんて決まっていなければならない

もしそんな所があったらすつとんでいく

(聖母短大児童文学研究会)

しよっぱなから驚かされたのは、次の言葉。

2+3=5 5+4=9 決まっていなければならない 決まっていけない世界！

というのも、中世カトリックの大神学者トマス・アクイナス(1225 - 1274年)の「神学大全」という著書の中に、全く同じ問題がとりあげられているからである。2+3=5、さらに、円はいつも丸いというようなことは、不変の真理に違いない。しかし、その永遠性と普遍性は、その事柄自体の本質ではなく、永遠の神である創造主によるという。学問的用語でいうと、ひどく難しくなる事柄が、子供の瑞々しい発想と全く軌を一にする真理。単に、数字の偶然というだけのものではない。学者と子供、それも、東

と西との見事な出会い。さらにいえば、「天地は過ぎ去る。しかし、わたしの言葉は過ぎ去らない」という、キリストの言葉にも通じる(マタイ24、35)。まさに、子供の問いは、天にまでとどくといえよう。宇宙の果てにまですつとんでいく現代っ子。ジャンヌ・ダルクのような、男勝りの小さいやまと撫子。こうした子供がいる限り、わたしは日本の未来に失望しない。果てしない大空に咲く曼珠沙華を見る思い。神に栄光あれ！

チビッコ哲学者(2)

ぼくのした 5才 しまだのぞむ (口頭詩)

ぼくのした 「うごけ」といったときは

うごいたあとだ ぼくのしたを

ぼくよりききに

うごかすのは なにや

(聖母短大児童文学研究会)

まだ5歳の男の子、自己観察の可愛い芽生え。大人になると、およそ考えもしないことをみせてくれる子供の問いは微笑ましい。自分でやってみて、なるほどと思った。こんな何でもない小さなことを考えることから、大きな発見がなされることもまれではない。ニュートンと林檎の話は余りにも有名。すでに彼の何百年も前から、林檎はあり、毎年無数の実が庭に落ち続けたに違いない。だが、誰も重力の法則には気付かなかった。深い真理はありふれたことの中に隠されているらしい。

「ものが動く」という、至極当たり前の事実を凝視するうちに、「神の存在」を読みとったのは、前記の偉大な神学者トマス・アクイナスであった。運動の第一原因となるものは、自らは不動でありながら他者を動かすもの。存在についても同じ。卵と鶏とは、どちらが先に存在したのか？ その疑問は堂々巡り。「2は鳥」などとごまかしても駄目。難しい哲学用語では、「偶有的存在」と「必然的存在」の区別が必要となる。やさしく砕けば、「タタタあるもの」、「イツモあるもの」。前者は一時的、後者は永遠。後者が「神」といわれる。のぞむ君は、それは、「なにや!？」という。その「なにや」から、「誰や」の問いへ。人生の豊かさは、その問いの深さにかかる。